

THE QUIZ

相本孝思 Takashi Sugimoto



アルファポリス文庫

私たちはなぜ生まれ、なぜ死んでゆくのか。何を為すための、何者なのか。
私たちは存在からして疑問を持つ。私たちこそクイズそのものなのです。

Opening

「……緊張してる？ 翔太」

隣に立つ添川陽奈が少し笑ってそう尋ねたが、笠間翔太は高い天井を見上げたまま軽く首を傾けて否定した。生まれて初めて入ったテレビスタジオは、明と暗とが混在した奇妙な光景として目に映っていた。広く、薄暗い世界はコンクリートの壁に囲まれて、隅には木材や布や、よく分からないガラクタが乱雑に積み上げられている。中央に建てられた撮影セットは複数の照明を受けて白く輝き、その前方には何台もの大きなカメラが静かに佇んでいた。

「誰もいないな」

笠間は撮影セットに目を向けて呟く。その様子はまるで、廃墟の中に建てられた近未来世界。あるいは資金繰りに失敗し、舞台以外は中途半端な形で捨てられてしまったイベントホールのようにも見えた。辺りにスタッフの姿はなく、ホコリ混じりの澱んだ空気だけがゆっくりと漂っている。

「どうすればいいんだ？ 俺たちは」

『敷島陸』と書かれた名札を付けた大柄な男がそう呟くと、他の9人も無言の内に肯いて返した。非日常的な状況に戸惑ってはいるが、人の姿が見えない分笠間は落ち着いた気分で見られる。他の出演者たちもそうらしく、見知らぬ者同士の距離を保ちつつも割とリラックスした雰囲気を感じられていた。

「とりあえず、セツトの方に行くんじゃないかねえの？」

別の男が、無数の傷と黒い染みに汚れた床を踏みしめながら言う。

「いいのかな？」

皆お互いを見ずに会話を成り立たせている。やがて先ほどの敷島が撮影セツトに向かつて大股で歩き出すと、他の者たちもそれに倣ってのろのろと足を進め始めた。スタツフの姿が見えないのは不思議だが、それでも待ち惚けずに何か行動を起こそうという気になるのはさすがだと笠間は思った。

「みんな、あの予選をクリアしてきたんだよね」

視聴者参加型のクイズ番組の話を持ち出してきたのも、行動力のある陽奈の方からだった。雑誌の広告で見つけた秋の新番組への参加募集記事。1億円という破格の優勝賞金を賭けて、参加者同士がクイズで競うという内容に興味を抱いた2人は、大学生になって3度目の夏の暇潰し程度の気持ちで予選大会への参加を希望した。

「そんな弱気でどうすんのよ。私たちだってクリアしてきたからここにいるんじゃない」

参加者たちの背中に目を向けながら陽奈は言う。テレビ出演を意識してか、彼女は長い髪を珍しく丁寧に仕上げている。ロングスカートまで穿いていた。笠間はいつもと変わらず、気楽なシャツとデニムだ。

「陽奈はそうだろうけど、俺はまぐれだよ。絶対」

休暇中の私立高校の教室を借りて行われた予選大会は、数百名の応募者をふるいにかける一斉ペーパーテストだった。出題数は全部で100問。内容は高度な知識を求める問題ばかりでなく、発想の豊かさや論理力を問う記述式の問題も多く含まれていた。

【問題58】

『太陽は、必ず西側に沈むでしょうか？』

まるで本や映画のタイトルにでも使われそうな問題。考えるまでもなく、太陽は東側から昇り西側に沈んでゆくだろう。角度の差はあれど、それはアメリカであってもアフリカであっても当然変わらない。それでは解答は『その通り』となるのだろうか？ かしそんな常識がクイズとして出題されるはずもない。

【回答】

沈まない。
極地、あるいは地球外においてはその限りではない。

笠間はそう回答した。世界の果て、北極点と南極点に立てば太陽は西には沈まない。北極点では全ての方角が南に、南極点では北になるからだ。また問題は地球内とも限定していない。地球とは逆に自転している金星などでは太陽は東に沈むだろう。太陽は、必ずしも西側に沈むわけではない。例外はいくらでも存在する。

【問題82】

『47都道府県の中で、どれか1つをなくすとすれば、どれがいいでしょうか？』

この問題は笠間には分からなかった。『どれもなくすべきではない』という回答は恐らく求められてはいない。隣県と合併するのか、なぜか独立国となるのか、いきなりブラックホールに呑み込まれるのかは分からないが、とにかく1つの地方をなくさなければならぬ。ではどこが相応しいだろうか。

【回答】

鳥取県。

笠間は一応、そう回答した。手掛かりは人口と領海権だった。少なくとも首都であり人口の最も多い東京都をはじめ、人口の集中している地域をなくすわけにはいかない。そして日本の最北端を持つ北海道と、南端の多くを持つ沖縄県もなくなると大きな問題となる。これらも必要だろう。鳥取県は都道府県中、最も人口が少ないという知識を笠間は持っていた。加えて国土の端にあたる地域でもないので領海・領空が減ることもない。ここなら仮になくなったとしても充分に対応できるだろう。笠間はそのような言葉を回答欄に目一杯書き綴った。

「でもああいう問題って、翔太の方が得意だったと思うよ」

「そう？」

「だって、理屈っぽいし」

陽奈はそう言っていたはずらっぽく笑う。その顔が本当に嬉しそうに見えるから、笠間は反論できない。

「まあ、言い訳がましいんだろうね。俺は」

およそクイズ番組の予選大会とは思えない高レベルの問題群に笠間は戸惑い、決勝大会まで勝ち残るのは早々に諦めていた。クイズやパズルの類は好きな方だが、マニアと

呼ばれるほどの知識や能力は持っていない。大学の成績も陽奈と比べるとかなり下がる。平凡な自分が参加すること自体無謀だったと思いながらテストを進めていった。

「まさか2人でここへ来れるなんてね」

「俺は絶対、テレビで陽奈を応援すると思ってた」

「私も。どうせ家で翔太と答えの言い合いをするだけだろうなって思ってた」

「あ、俺も落ちてるんだ」

それだけに1週間後に送られてきた本戦の出場権の通知を見て笠間は目を丸くさせた。まさか10名の合格者の中に自分が入っていたとは想像もしていなかった。そして参加の応募用紙を手に慌てて陽奈の元に駆け付けると、同じ用紙を握り締めた彼女がそこにいた。

「席に着くのかな？」

『柳原七海』という名札を付けた派手な女が、セットの中央に掲げられた巨大ディスプレイを見上げて言う。円形に並んだ回答席の全てから見える4面のディスプレイには、『指定の回答席に着いてください』との文字とともにそれぞれの席の番号と参加者の名前が図で表示されていた。笠間翔太は左下の4番、添川陽奈は3つ右隣の7番の回答席だった。

「なんか不案内だな、おい」

あご髭を伸ばし、ストリート系のだぶついた恰好をした男が毒づきながら言う。名札

には『小瀬翼』と書かれていた。

「やつば、すごい人たちが揃ってるわねえ」

側にいたジーンズ姿の女が呟く。

「あの、誰か有名な人がいるんですか？」

その言葉を聞きつけた陽奈が声をかけた。

「え？ ああ、聞こえちゃった？」

女は照れた笑みを浮かべて返す。『有里瞳』という名札を付けた女は、少し年上のように見えた。

「そうねえ……あの『紀寺さくら』って子は将棋の女流棋士さんよ。たしか」

有里はそう言って背の低い少女を軽く指差す。顔は幼く、地味な服装をしているが、落ち着いた雰囲気漂わせていた。

「へえ。中学生くらいに見えますけど」

「まだ高校生よ。でもかなりの実力者で、名人か何かって呼ばれてるみたい。テレビで観たことあるわよ」

「すごいですね」

「それに向こうの敷島陸って人も観たことあるわね。大学アメフトの強豪チームでクォーターバックをやってるとか」

「クォーターバックって何ですか？」

「攻撃の司令塔よ。頭腦的なブレイと優れた統率力を持つ将来有望な選手とか言われてた。他にも経済学や株の勉強もしているんだって。これもテレビで得た知識だけだ」

紺色のスーツを着た敷島は早々と回答席に着き、教壇のような机に両手を付いてじつと前方を見据えている。短髪で精悍な顔つきをしているが、その意思の強そうな眼差しには知的なところも感じられた。

「……あの、やんちゃなカッコした子も見たことあるわね、多分」

「やんちゃ？」

ストリート・ファッションの小瀬翼は落着かない様子で辺りをきょろきょろと見回している。

「計算とか、数学とか、そっち方面有名なはずよ」

「有里さんは？」

「あたし？」

「有里さんも何かあるんでしょ？」

「ううん。あたしは、ただのテレビ好きのサラリーマンかな」

有里は気さくに笑って否定する。

「でもこうして本戦にまで来れたんですから」

「クイズとかトリビアとかが好きなのよ。あたしはその程度。あとは運が良かったのかな？」

「そんなので予選は通過できませんよ。ね、翔太」

「え？ ああ、どうかな」

急に話題を振られ笠間戸惑う。

「まあ、運も実力の内と言うし。いや、有里さんのことじゃないけど」

それはむしろ自分のことだろう。

「あら、あなたたちは知り合いなの？」

有里が2人を見比べながら尋ねる。

「はい。一応、カレシカノジヨです」

陽奈が笑って返す。

「ええ、すごいじゃん。秀才カップル？」

「まさか、たまたまですよ。ね？」

「うん」

笠間もこれには淀みなく答える。

「ふうん。でもいいじゃない。どっちが優勝しても賞金を山分けできるじゃん」

「そうなんですよ。だから私もずいぶん気が楽なんです」

「優勝する気なんだ」

「当然。1億円だよ、1億円。私イギリスに住んでた頃、賞金100万ポンドのクイズ番組をずっと観てたの。出たいなあと思ってた」

10歳まで英国に滞在していた彼女は、胸の前で両手を合わせて言う。

「念願叶って良かったじゃないか」

「うん！ でも私自信ないから、翔太が優勝してね」

「無茶言うな」

「ダメよ。もうバイトの子にも言い触らしちゃったもん。簡単には負けられないよ」

「ええ、困るなあ」

笠間は本当に顔を曇らせてそう言った。陽奈は駅前のケーキショップでアルバイトをしている。仲の良い女ばかりの職場だそうだから、賞金1億円なんて聞いたら散々盛り上がったことだろう。

「陽奈の方が得意だろ。俺は、こういう場自体も苦手だよ」

予選大会は気ままに挑戦できたが、本戦の、しかもテレビ番組となると今更ながら怖じ気づいてしまう。

「じゃあさ、答えだけ教えてよ」

陽奈は戯けた調子で微笑みかける。やはり、いつもより少しはしゃいでいる風に見える。

「面白い人たちね」

有里が2人の様子を見て笑う。笠間は苦笑いを返すしかなかった。

「あのー、そろそろ席に着きませんか？」

遠くから声が聞こえて笠間たちは振り向く。回答席には手を上げて呼びかけている敷

島をはじめ、もう他の参加者も待機していた。

「あ、ごめんなさい」

3人は慌ててそれぞれの回答席へと向かう。有里は笠間の右隣の席に着いた。

回答席に椅子はなく、床より一段高くなった足下には、靴の底を象った印が描かれていた。笠間はその上に足を置いて辺りを窺う。テレビ番組のセットをこんな風に間近で見ると初めてのことだった。床も机も背面の壁も滑らかな形状をしており、どれも内部からの照明で乳白色に発光している。いささか殺風景にも見えるのは、後でコンピュータ・グラフィックス処理でも施されるのだろうか。

顔を上げると斜め上には、巨大な液晶ディスプレイがこちらを見下ろしている。ディスプレイは回答者のそれぞれから見えるように4面設置されていた。目線を下げると床からは、笠間の表情を撮るためだけのカメラが向けられている。手元の机には1から10までのボタンが並んでいたが、何をする為にあるのかはまだ分からない。ボタンの隣にはワイヤレスのピンマイクと共に『胸元に付けてスイッチをONにしてください』とのメモ書きがある。どうやら何から何まで自分たちでやらなければならないようだ。

「カメラ、動いてる……」

左隣にいるロングヘアの女が細い声で呟く。目の前のカメラは笠間たちの動きをとら

えて自動的に細かく位置を調節していた。部屋の至る所に設置された他のカメラも時折音も立てずに移動している。この番組はスタッフが誰も姿を見せないままで進行していくようだ。

白い部屋に立つ、10人の参加者。男が5人で、女も5人。笠間のちょうど向かい合った席には黒いスーツを着て黒縁眼鏡を掛けた男が立っており、その右隣にはチェック柄のシャツを着た背の高い男がいた。この2人は笠間より少し年上のように見える。彼らもどこかの有名人なのだろうか。クイズで競う相手だと思いと、何だか誰もが自分より賢そうに見えてしまう。

「で、これからどうするのー？」

露出度の高い服を着た柳原がそう言って口をへの字に曲げる。こういう場では派手めの彼女が一番まともに見えてしまうから不思議だ。

「皆さん、マイクはオンにしましたか？」

敷島の言葉を聞き笠間は慌ててピンマイクのスイッチを入れる。するとそれに呼応するかのように4面の巨大ディスプレイの映像が変わった。

「あ、始まった」

隣の有里は、とりあえず何でも声に出す人らしい。ディスプレイの中には、バーのカウンター席にあるようなスツールが一脚、真上からのスポットライトを受けて銀色に

光っている。その周りは完全な暗闇で何も見えない。何が始まるんだろう。皆が見上げたまま固定まっついていると、ディスプレイ横のスピーカーから静かに、姿の見えない者の足音がコツコツと聞こえてきた。

『クイズ……それは単なる娯楽のひとつに過ぎないのでしょうか』

低く、通りの良い声がスタジオに響き渡る。ディスプレイにはまだ変化はなく、足音だけが続いている。

『疑問を持つということ。難問に立ち向かうということ。それは他の動物にはない、人類が人類たり得る最大にして最高の能力ではないのでしょうか』

やがてディスプレイの奥から1人の中年男性が姿を現した。ダークグレーのスーツを身に付けた濃い顔。オールバックの黒髪がポマードで光っている。

『と、私は考えます』

「フジコーだ……」

有里が唇を僅かに動かす。中年男性はテレビでよく観る顔、人気司会者『フジコー』こと、藤尾康平だった。

『なぜ火は燃えるのか？ なぜ水は流れるのか？ なぜ風は吹き、なぜ土は命を育むのか？ 私たちは世界のあるべき姿にも疑問を持ち、それらを解き明かしてきました』

藤尾はスツールを越えてさらに『ディスプレイに近付く。ことは別のスタジオで撮影されているのだろうか？ 参加者は誰も口を開かず、じつと彼の言葉を待ち続ける。笠間が少し目を動かすと、同じようにこちらを窺う陽奈と目が合った。』

『疑問は時には憎しみを生み、悲惨な戦争をも引き起こします。しかし正しき道を探し愛を深め合うのもまた、己への問いかけによるものに他ならないのです』

笠間は左隣にも目を向ける。先ほどのロングヘアの女の胸には『惣家愛美』という名札が付けられており、その近くでは少し大きい十字架のネックレスが銀色に輝いていた。ツヤのある黒髪に清楚な印象を受ける。

『私たちはなぜ生まれ、なぜ死んでゆくのか。何を為すための、何者なのか。私たちは存在からして疑問を持つ。私たちこそクイズそのもののなのです』

笠間の心臓が少し早くなる。いつか、どこかで与えられたクイズ。誰もが一度は考えて、やがては忘れていく命題。藤尾はようやくスツールに腰掛けると、その長い足をゆくりと組んでから笠間たち、正確にはカメラのレンズにじっと目を向けた。

『ようこそ。挑戦者の皆さん』

藤尾は口角を持ち上げてダンディに微笑む。さすがにその姿は様になっている。

『全国5887名の参加者の中から勝ち抜いてきた皆さんは、誰よりも優れた頭脳を持

つ者たちでもあります。また誰よりも人間らしい者たちでもあるでしょう』

クイズ番組というよりはまるで教養番組のようだと笠間は思った。バラエティっぽさが全く感じられないのは演出なのかも知れないが、家で寝転んで観るにはいささか堅苦しい気がした。

『だからこそ皆さんは、知恵と運命の女神に愛されてここへと辿り着きました。皆さんは自らの人生を切り開き、世界の常識をも覆す力があります』

藤尾は手を大きく広げると、スポットライトの降り注ぐ天を仰いだ。

『さあ！ その力を我々に見せてくれ。人間本来の姿を我々に思い出させてくれ！』

そのほとんど叫ぶような声を受けて、荘厳なパイプオルガンの音色が響き渡る。

『勝てば1億、負ければ地獄。クイズ「デッド・オア・ドリーム」の始まりです！』

音楽はさらに高揚し、動き回る照明が無機質なセットに明暗のコントラストを演出する。正面のカメラが伸び上がって顔をとらえると、思わず笠間は目を逸らしてしまった。視線の先にいた陽奈ともう一度目が合うと、彼女は何とも言いようなない苦笑いを漏らす。一気に高められた緊張感について行けなくなっていた。

『……クイズ「デッド・オア・ドリーム」』

パイプオルガンの音が止むと共に、藤尾は再び話し始める。

『それは完全自動制御で組まれた特別スタジオにて行われます』

ディスプレイの下に取り付けられたカメラがぐるりと回り会場を見渡す。笠間はもう、

機械の動きは意識しないことに決めていた。

『既にお気付きの通り、そこには皆さん以外には何者もいません。拍手で迎えてくれる観客も、こっそりヒントを教えてくれるスタッフもいません。あなたと、他9名。自分1人だけの戦いなのです』

笠間はちらりと陽奈に目を向けるが、今度はもうこちらに気付いてはくれなかった。問題にもよるが、味方が1人でもいるのはとても有利なことかも知れない。

『ルールはただ1つ。これから私が出すクイズに正解し勝ち抜いていくこと。優勝者にはチャンピオンの栄光と、賞金1億円が授与されます』

そして藤尾は一呼吸置く。

『ただし、不正解だと消えていただきます』

藤尾の恐い眼差しに笠間は息を飲んだ。消える、とは退場させられるということだろうか。それともコンピュータ・グラフィックスの処理で『いない人』の扱いを受けるのだろうか。いずれにしても回答を間違えるとそこで出演は終わってしまうのだろうか。藤尾は全員がルールを把握したことを知ると満足げに体を反らせる。

『それ以外の条件は一切ありません。回答のために諸君が話し合いをしても構いません。またスタジオにある物や、今自分が持っている物なら何でも使って結構です。ただしセツトは壊さないように』

この言葉には皆一様に驚きの表情を見せた。藤尾は、解答を導くためには参加者同士

が協力しても良いと言う。これでどうやってクイズゲームが成り立つのだろうか。全員が申し合わせて同じ回答を出せばどうするのか。しかし笠間はその状況を想像すると、すぐにこのルールの意味を理解した。

全員が同じ答えを出しては、優勝者は決まらない。

笠間は口を噤んだまま、視線だけを動かし辺りを窺う。誰も何も言わないのは多分、同じことに気付いたからだろう。回答を話し合っても構わない。しかし優勝するためには他の者たちが間違えなければならぬ。つまり、いち早く答えを出した者は、誰にも気付かれないように隠し通さなければならぬのだ。恐らくそれは他者との会話を禁止するルールよりも難しいものになるだろう。ライバル同士が協力なんてするはずがない。結局は藤尾の言った通り、自分1人だけの戦いを余儀なくされるのだ。

『さて、何か質問はありますか？』

藤尾は皆にそう尋ねるが誰も口を開かない。敷島や有里さえも黙ってディスプレイを見上げていた。陽奈もようやく緊張した表情を見せている。笠間が頼りにできるのは彼女だけだろう。藤尾はしばらく皆からの発言を待っていたが、質問が返ってこないと分かる。と右腕を高らかに持ち上げて宣言した。

『それでは早速、第1問目です』

Question-1 COLORS

藤尾の声と共に床が静かに震動を伝え始める。何事かと思う間もなく、セット中央の床が開き、下から白い机が迫り上がってきた。机の上には赤や青など色の付いた水を入れた瓶が並んでいる。

『第1問。ここにそれぞれ10色の液体が入れられた瓶が10本あります。しかしこの中の9本は仲間同士ですが、1本だけ仲間外れのものがあります。さて、その仲間外れとは一体どれでしょうか？ 皆さんはそれ以外の9本のどれかを選んでください』

藤尾はそう出題すると口を閉じた。皆は瓶の並んだ机を見つめたまま固まっている。

「……それだけ？」

『有里瞳。問題はここまでです』

藤尾は軽く目線を下げると冷たい口調で返す。その辺りに全員の顔を映し出している

モニタでもあるのだろうか。本戦の第1問目は知識や証明を問うような問題ではなく、まさしくクイズだった。

横一列に並んだ水の色は、左から白色、黄色、青色、赤色、紫色、橙色、緑色、茶色、紺色、黒色の10色。店で売られているジュース瓶のようにガラス製と思われる瓶に入れられ、口はしっかりと封印されていた。10色の中の仲間外れ。何か意味のある色なのか、それとも『赤』や『青』といった言葉が関係しているのか。いや、並べられている順番にこそヒントが隠されているのか。

「フジコーさん」

敷島が机から顔を上げて藤尾を呼びかける。

「近付いて見てもいいですか？」

『敷島陸。結構です。触つても、持ち上げても構いません。ただし、割ったり、キャップを開けて水を舐めるのは禁止です』

「……それは、答えに関係ないからとみていいんですね？」

『その通り。味や匂いは無関係です。そして回答が出揃った後で皆さんにその水を飲んでいただきます』

敷島がしっかりとした足取りで机に近付いていくと、カメラもその後を追って回転する。それを受けて他の参加者たちもセットの中央に向かって動き始めた。

「……何だか分かる？ 陽奈」

隣に來た陽奈に向かつて小声で尋ねる。長い髪が笠間の腕に触れていた。

「うーん。色は、カモフラージュなんじゃないかな」

10色並んだ瓶をじっと見つめて彼女は応える。

「カモフラージュ？」

「クイズって見えない部分にヒントが隠されている場合が多いよ。こういう場合、色だけにとらわれていたらダメな気がする」

「なるほどな」

笠間はそう呟くとセット中央の机に向かつて足を進める。陽奈もその後ろから付き従ってきた。机は他のセットと同じように白く光り、瓶の前に番号の書かれた紙が並べられている。番号は左から『0、1、2、3、……』と続いていた。

「これは……ただの番号札かな？」

「でも、0から始まるのっておかしくない？ 普通は1から始めるよね」

陽奈が背後から鋭く指摘する。クイズ番組に出たがっていただけあつてさすがに頼りになる。

「他に何かあるかな。……重さ？」

笠間はそう言うのと目の前の紺色の瓶を手に取り、陽奈はその隣の茶色の瓶を取った。瓶の中の水面が僅かに波打つ。しばらく見つめた後、お互いの瓶を交換する。

「重さ、変わらないよね？ 翔太」

「……うん、多分」

「正解の2つだったにして」

「そうかも」

一応その他の瓶も持ち上げてみるが、やはり重さは変わらないように思えた。瓶の形状も、材質も変わらない。軽く振ってみても変化はない。

「実は底に○×が書いてあったりして」

陽奈はそう言つて笑いかける。

「まさか」

それでも一応確認せずにはいられない。机の向かい側では有里も瓶を持ち上げ底を見上げていた。

「……くっそー、陽奈ちゃんに騙された」

「えー、騙してないですよ」

他の参加者もあれこれ調べているようだが、思案する唸り声がたまに聞こえてくる程度で誰も答えを見つけれられていないようだ。天井の照明に瓶をかざすと細かい傷のようなものが見えるが、これを答えにするには無理があるだろう。これはテレビ番組なのだ。それならやはり、分かりやすく色だけの問題なのだろうか。

「……おお、そうそう。色は赤、青、黄色、緑、オレンジ、紫、茶色、紺色、白、黒だ。

何か、思い付かないか？ は、俺？ 分かんねえから聞いてんだよ！」

ぼそぼそという声が聞こえて振り返ると、小瀬が携帯電話で誰かと会話をしているのが見えた。彼はこちらに気付くと少し首を傾け顔を逸らす。

「あ、あんなの、いいんですか？」

女流棋士の紀寺さくらが言う。

「……持っている物なら何を使ってもいいというルールだからね。答えが分かるならそれもありなんだろう」

回答席で笠間の正面に立っていた黒スーツの男が答える。名札には『當麻勇斗』と書かれていた。余裕ぶった態度をとっているが、彼は答えが分かったのだろうか？

「私も誰かに聞いてみる？ 翔太」

陽奈が携帯電話を取り出し尋ねる。

「……でも、分かりそうな人もいないな」

笠間も頭の中で友人を捜してみたが、めばしい人物は思い付かない。そもそもクイズ好きの自分たちが分からないのだから、周囲に期待するのも難しいだろう。

「もう選んでもいいんですかー？」

突然、柳原がデイスプレイに向かってそう言った。

『柳原七海。結構ですよ。回答の瓶を取って自分の物にしてください。早い者勝ちです』
「じゃあ……これ！」

柳原は大きく手を伸ばすと紺色の水の入った瓶を取り上げた。笠間は彼女と、残り9本となった瓶を見比べる。

「何？ 分かったの？」

携帯電話を閉じた小瀬が声を上げる。

「え、さあ、分かんない」

柳原はそう答えて舌を出す。

「言いたくないんじゃないよ。ほんとに分かってないの。でも10本の内の1本が外れなら、残りの9本はオッケーなんでしょ？ だったら数の多い内に直感で選ぶ方が得じゃない？ アタシ、運とかもいしいしー」

単純な発想だが、これはこれで正しいかも知れないと笠間も思った。そんな思い切りの良さが正しい結果を招くことも多いだろうし、そもそもテレビ番組なのだから、それくらいの気楽さがあってもいいのだろう。

「参ったな。9本になっちゃった」

「平気だよ。それでも8本は正解なんだから」

「何かないか？ 陽奈」

「でもこういうのって、翔太の方が得意なんじゃないの？ パズルとか」

「これはパズルなのか？」

「じゃあ、僕はこれを選ばせてもらおう」

眼鏡の當麻はそう呟くと、細い左手で紫の瓶を掴んだ。彼はやはり答えに気付いていたようだ。

「あ、じゃ、じゃあ僕は……」

チェック柄のシャツを着た長身の男がぬうつと手を伸ばして赤色の瓶を持ち上げる。名札には『塩谷和彦』と書かれていた。

「……まずいな」

「虹、の色かな？」

陽奈は小声で話しかける。虹の色は一般的に、赤色、橙色、黄色、緑色、青色、藍色、紫色の7色とされている。瓶の順番を並び替えて、紺色を藍色とみれば全ての色が揃っていた。

「でもそれだと、茶色、白色、黒色の3つが余るよ。外れは1つのはずなのに」

「うーん、そうなんだよね」

笠間の返答に陽奈は口ごもる。余った色の中でも白と黒の2色は何か逃げ道があるような気もする。しかしそれが分からない。

「おお、おっほ、そうかそうか」

そうこう考えている内に、離れた所で1人考え込んでいた敷島がおかしな声を上げて机に近付く。

「そういうことな」

そして彼は茶色の瓶を取り上げ胸に抱いた。

「分かったの？」

思わず有里が尋ねるが、彼は満面の笑みで頷くばかりだった。茶色は、仲間外れではない。残った瓶は白色、黄色、青色、橙色、緑色、黒色の6本。残った参加者は笠間、陽奈、有里、小瀬、紀寺、惣家の6人。10本の瓶の内仲間外れは1本。1色だけが仲間外れ。左から並べられた番号札の意味はあるのか。考えれば考えるほど思考は停滞し、焦りと緊張が増大する。せめて第1問目くらいは通過したい。どうする？ 笠間はズボンのポケットから携帯電話を取り出すが、指は動かない。

「やっぱり誰かに聞いてみる？」

「でも、誰に……」

そう呟いた瞬間、笠間の脳に新しい発想が浮かんだ。

「それかも、白と黒以外のどれかを選んでみようか、翔太」

「ちよつと待って」

笠間は陽奈を制すると携帯電話のキー操作を始める。

「携帯電話を使ってもいいんだよね」

「誰に聞くの？」

「……みんなに聞くんだ」

笠間は携帯電話でインターネットメニューを立ち上げると、ブックマーク登録されて

いた検索サイト『シーガル』へのアクセスを始めた。

「あ、検索するの？」

隣から小さなディスプレイを覗き込んで陽奈は尋ねる。笠間は無言で頷きながら検索フォームにキーワードを入力し続けた。『シーガル』は、現在世界最高の検索速度と対象ページ数を誇る検索サイトだ。解答のヒントとなるページも、きつと存在する。

「あ……」

女流棋士の紀寺が思い付いたように小さな声を上げると、机に近付き黄色の瓶を手にする。

「ええ、そんな！」

有里が声を上げる。

「マジかよ……畜生」

小瀬は紀寺を背後から睨みつける。惣家は口を結んだまま、じつと固まっている。笠間は携帯電話のディスプレイを見つめつつ、高速でキー操作を続けていた。色の名称が掲載されている印刷業界のサイト。ホームページ制作の基礎が学べるサイト。ファッション関係の話を取り扱っている個人ブログ。頭上の藤尾がこちらを見ているような気がする。時間制限はないのだろうか。色の数を減らして再検索する。

「翔太あ」

陽奈はじつとしていられない様子で机の周りをうろつく。やがて笠間の携帯電話は、

解答を示すサイトによく辿り着いた。

「これは……」

笠間の指が急停止する。サイトでは仲間外れの1色を除く9色が紹介されている。その解答は、色と順番の2要素を併せ持つものだった。

「……なんだ、そういうことか」

「何？ 分かったの、翔太」

笠間は携帯電話を閉じると彼女に向かって小さく肯いた。

「選ぼう陽奈」

「え、でも、どれを？」

「……どれでもいいんだ」

笠間は緑色の水が入った瓶を、解答が分かっている陽奈は怖ず怖ずと隣の橙色を選択した。その後有里、小瀬、惣家はそれぞれ、青色、黒色、白色を選ぶ。多分この3人も答えは分かっているだろうが、笠間はもう気にしてはいなかった。

『さて、全員選びましたね』

参加者全員が瓶を持って自分の回答席に戻ったのを確認してから藤尾がそう言う。自動操作のカメラが全員の表情を追っていた。

『それでは、その水を一気に飲んでください』

訳の分からないままに皆は瓶の蓋を開けて中の水を飲み干す。笠間の口内に無味無臭の水が流し込まれた。横目で陽奈を見ると彼女もただの水のように飲んでるのが見える。こういうのは大抵、仲間外れの一つに唐辛子か何かが含まれていて、飲んだ瞬間に吹き出してしまうのがオチだ。笠間は瓶を机に置くと、不正解者の方にそっと目を移す。しかし不正解者も平然と瓶を置いて息をついていた。何も起こらない。もしや自分の答えが間違えていたのかと思ひ他の参加者にも目を向けるが、誰も何も変わらないままだった。

「……あれ、何も起こらないの？」

有里が呟く。妙な間に、番組進行上のミスが発生したのではないかと心配させられる。『では第1問目の解答です』

藤尾の声が聞こえて皆は顔を上げる。彼は皆の戸惑う表情を楽しそうに見つめていた。スタジオに静かな緊張が走る。

『不正解者は、紺色の水が入った瓶！ 柳原七海、残念です！』

「えええ？ 私が」

柳原は思わず声を上げた。笠間は肺に溜まっていた空気を鼻から一気に吐く。予想通りの解答に安心した。藤尾は満足げな笑みを浮かべて話を続ける。

『ヒントは色と順番です。机に並んでいたさまざまな色のついた水が入った瓶。実はこれは、『ビリヤードの球の色』が関係していました』

藤尾はそう言うと言とスーツのポケットからビリヤードの球、赤色の3番球を取り出し皆に見せた。

「あ、そうか」

小瀬が思わず声を上げる。有里と陽奈は口を開けて固まっていた。

『小瀬翼。そういうことです。左から0. 白色、1. 黄色、2. 青色、3. 赤色、4. 紫色、5. 橙色、6. 緑色、7. 茶色、8. 紺色、9. 黒色となっていた10本の瓶。この色と順番は、ビリヤードの玉のナンバーと色が順番に並べられていました。すなわち、0番目は白球である白色。次は1番球の黄色。そして2番球の青色、3番球の赤色と続き、仲間外れの紺色を抜くと8番球は黒色となります。ちなみにそれ以降は白球の黄色線、青色線、赤色線となり15番球の茶色線まで続きます』

笠間が携帯電話で見つけたのはビリヤードの情報を掲載しているサイトだった。そこには藤尾の話と同じルールが基礎知識として紹介されていた。

『また、この問題は球の色の全てを知らなくても予想は付けられるでしょう。なぜならこの色の順番は、プレイに迷わないためにも暖色系と寒色系とが交互に並べられているからです。白球を自分の球だと気付いていれば、暖色の茶色の後に寒色の紺色と黒色が並んでいるのはおかしい。どちらが仲間外れなのか分からなければ、その2つ以外を選択すれば良いのです』

答えが分かれば大した問題に思えなくなるのもクイズだ。しかし笠間も結局、検索サ

イトに頼らなければ解答は得られなかった。1問目はなんとかクリアできたが、先が思いやられる。デイスブレイから顔を下げると、初戦で見事にも不正解となってしまうた柳原の顔が見える。余程シヨックだったのか、その表情は先ほどと打って変わって虚ろなものになっていた。□も、だらしく開かれている。

その鼻からは、赤い血が一筋流れ出していた。

「……柳原、さん？」

左隣の席に立つ陽奈が思わず声をかける。その言葉に柳原は僅かに体を震わせると、目覚めたように陽奈の方を向く。

「……え、何？」

「あの、血が」

「え？ あ、何これ」

柳原は慌てて手の甲で鼻血を拭う。体調が悪かったのか、なぜか鼻の中を怪我したのか。ともかく突然のアクシデントに参加者は皆驚きの表情を見せた。どうしたのか。とにかくこれは柳原としても番組としてもまずい事態だろう。柳原は机に顔を伏せて必死で血を押さえる。

『という訳で、不正解者は紺色の水を選んだ柳原七海でした』

しかし藤尾は、バリトンの利いた低い声で平然と宣言する。柳原はデイスブレイの藤尾に向かって顔を上げるが、すぐにまた突っ伏して激しく咳き込む。喉の奥から何かが割れるような音を鳴らすと、白い床に大量の血が飛び散った。

「いやあ！」

惣家が声を上げる。両隣に立つ當麻と陽奈が思わず身を引く。両手で自分の首を絞める柳原の肌は血に汚れ、鼻と耳と、目からも血が流れ出している。

「ダレカ……」

彼女は皆に向かってゴボゴボという音と共にそう言うと、そのまま回答席の後ろに倒れる。そして数回全身を激しく震わせると、もう動かなくなってしまった。

「な、何……」

広がる血溜まりを見下ろす陽奈が、震えた声で呟く。

「お、おい！ 何だよこれ」

狼狽えた小瀬の声が裏返る。

「フジコーさん！ 大変だ！」

敷島が太い声で藤尾を呼んだ。

『敷島陸。何でしょうか？』

デイスブレイの向こうで藤尾は落ち着きのある声を返す。

「何かって、そっちからも見えてるでしょ！」

『有里瞳。もちろん、よく見えていますよ』

『柳原さんが、急に血を吐いたんです！ どうしよう、もう動かない』

『添川陽奈。他の皆さんも落ち着きなさい。取り乱すなどあなた方らしくありません』

藤尾はあくまで冷静だ。惚_{とほ}けているのではなく、事態を当然のように受け止めている。

当然のように？

「……これって」

『笠間翔太。何でしょうか？』

「ああ、いや……」

笠間は口ごもる。まさかそんな。

「……不正解、だからですか？」

當麻の質問に皆の会話は止まった。

「不正解だから、彼女は死んだのですか？」

『當麻勇斗。その通りです。不正解者には消えていただきます』

藤尾は事も無げにそう言っていると、足を組み替えて参加者たちを見下ろす。

『柳原七海の飲んだ水には、即効性のある毒素を含ませておきました。飲んだ瞬間は平気ですが、胃酸と反応すると劇薬となり内臓が破壊されていきます』

「なんだって！ 何考えてんだ！」

敷島が叫ぶ。

「とにかく何とかしないと！ あたし、助けを呼んできます」

有里は言うが早いか、セットを離れてスタジオの入り口へと向かう。

『有里瞳。戻りなさい』

藤尾の声が響くが、有里は止まらない。

「私は救急車を呼びます」

陽奈はそう言って携帯電話を取り出す。

「で、では私は警察を……」

紀寺も掠_{かす}れた声でそう言う。

『添川陽奈。紀寺さくら。無駄ですよ』

藤尾は冷たく言い放つが、2人は無視して携帯電話を耳に当てる。

「どうなってるんだよ！ おい！」

小瀬は誰ともなく叫ぶ。その隣で惣家は、ただ青さめ震えていた。

「ちよつと、何これ！」

遠くで有里の声が聞こえる。見ると彼女は入り口の前で立ち往生をしていた。笠間は

セットに背を向けると彼女の元に駆け付ける。

「ドアが、開かないの」

有里はドアノブを捻り、押したり引いたりを繰り返す。

「……鍵だ、鍵が掛けられている」

ドアノブの上には番号入力式の電子ロックが取り付けられていた。自分たちがこのスタジオに入った後、いつの間にか閉じられたようだ。

「そんな、開けられないの？ 笠間君」

「番号が分からないと」

もちろん2人がそれを知るはずもない。笠間は有里を離すと力一杯ドアを蹴り付ける。

『笠間翔太。そのドアは鋼鉄できています。人の力では開けることは不可能です』

笠間はそれでも何度か蹴り付けたが、ドアは隙間すら開こうとはしない。足首に鋭い痛みが走った。

『笠間翔太。有里瞳。戻りなさい。そろそろ次のクイズを始めます』

「クイズ？ それどころじゃねえだろ！」

藤尾の淡々とした態度に小瀬が吠える。

「……ダメだな、柳原さんはもう死んでる」

眉を顰めた當麻が彼女の手首を掴んで言う。

「そんな！ ど、ど、どうしよう」

その隣で塩谷が吃音気味の声を上げた。

『皆さんは、クイズを受けなければなりません！』

突然声のトーンを上げて藤尾が言った。芯の通った太い声が参加者全員の興奮を一気に抑え込む。

「あんたは、まだ！」

敷島がアメフトで鍛えた声を張る。

『なぜなら、皆さんもビンの中の水を飲んだからです！』

全員の、息を飲む音が聞こえた。

『……第1問目で飲んだ水。柳原七海の飲んだものは即効性の毒薬でしたが、皆さんが飲んだものには同種類で遅延性を持つ毒薬を含ませておきました』

「なんだって……」

小瀬が喉の奥から声を出す。

『その効果が現れるまでおよそ180分。ああ、既に充分体内に吸収されているでしょうから、今更吐き戻してももう手遅れですよ』

笠間は胃の奥で焼け付くような痛みを感じる。藤尾は何を言っているんだ。今このスタジオで何が起きているんだ。一つ空いた回答席。その白い床には赤黒い血が広がっている。急激な展開が焦りと恐怖になって襲いかかってくる。

『解毒剤は、クイズの優勝者のみに与えられます。よって皆さんはクイズを続けなければなりません』

藤尾は恐怖心を煽るようでもなければ、騙された参加者たちを嘲笑うようでもない。まるで自分たちを試すかのように平然と言い放った。彼は何を考えているのか。いや、このクイズ番組は何をしようとしているのか。ただ笠間に理解できたのは、もうこの場

から逃げ出すことはできないということだけだった。

『そしてもう一つ』

藤尾は顔の右側で人差し指を立てると、軽く頬を持ち上げ微笑んだ。

『外から助けが来ることは、絶対にありません』

Question-2 NUMBERS

およそ20分間。笠間たちは出口を探してスタジオ中を歩き回ったが、電子ロックの掛けられたドア以外に外へ出る方法は見つからなかった。窓もなく、部屋を囲む分厚いコンクリートの壁はとても壊せそうにない。絶望感の漂う中、柳原七海が流した血の臭いが時折笠間の鼻腔を掠めていた。

「……何が、目的なんですか？」

堪りかねたように敷島が低い声で言う。

『敷島陸。何でしょうか？』

頬杖から顔を上げて藤尾が尋ねる。

「何がしたいんだって聞いているんです！ 人を殺してまで！」

敷島は叱責するような顔付きを見せるが、藤尾は僅かに肩を竦めるばかりだった。

『困難に立ち向かう皆さんの姿を見たいからです』

「何言ってるんですかー！」

「バカげてゐるわ。こんな番組、放送できる訳ないじゃないですか」
敷島に代わり有里が声を上げる。

「何を考へてるのかは知りませんが、こんなの隠し通せるはずありませんよ。そうなたら制作スタッフは全員逮捕。フジコーさん、あなたの芸能人としての人生もお終いですよ。いいんですか？」

有里の表情を追ってカメラが動く。彼女は顔を背けて映ることを拒否した。

『有里瞳。自分ではなく私の心配をしてくれるとは、まだまだ余裕のようですね。それでこそ選ばれし挑戦者です』

藤尾はあくまでテレビ番組の調子で受け答えをする。もしかするとこれが彼本来の性格なのかも知れない。

「何で、警察も救急も来ないんだろう……」

笠間は上擦った声で呟く。重みのある絶望感が徐々に体を捕らえていく。

「フジコーは呼んでも無駄だって言ってたけど……」

隣の陽奈が言う。場所にもよるだろうが、助けを呼んで20分経っても現れないのはおかしい。

「……きつと、ここに辿り着く前に足止めをしているんだ」

「でも、どうして？」

「あいつら柳原さんを殺したんだぞ、それくらいするさ」

「そうじゃなくて。なんで人を殺してまで私たちにクイズを受けさせようとするの？」

『漆川陽奈。皆さんはそのためにここへ来たのではないのですか？』

すかさず藤尾が応える。どうやら胸元のマイクの電源が入っていると、小声でも彼の元には届いてしまうらしい。笠間はディスプレイに目を移して彼の顔を見るが、目が合っ

てすぐに逸らした。視線に捕らえられるのが恐かった。

「じゃあ、そろそろ席に着いて次のクイズに入ろうか」

床に座り込んでいた小瀬が立ち上がりそう言った。

「本気か？ まだクイズを続けるつもりなのか？」

敷島が驚いて尋ねる。

「だって、しょうがねえじゃん」

小瀬はふてくされた顔でそう返す。タイプは違うが2人とも笠間とあまり変わらない

歳のように見えた。

「どうも、そうするより他がないようだな」

黒スーツの當麻が溜め息をつきながら自分の回答席へと戻る。

「そんな！ クイズが始まったらまた誰かが死ぬかも知れないですよ」

これまで静かにしていた惣家が隣の小瀬に向かって言った。

「しかし惣家さん。僕たちの体にはもう毒が回っているんだよ」

反対の席に立つ當麻が代わって答える。

「何もしなかったら俺らは180分後に死ぬんだ。もう30分くらいは過ぎただろう。優勝したら解毒剤を貰えるらしいし、やるしかねえだろうが」

小瀬は乱暴な口調で惣家を責める。

「それともてめえが何とかしてくれるのか？ え？」

「……そんなの、信用できるんですか？」

小瀬の乱暴な言い方が気に障ったのか、陽奈が口を挟む。

「何だよ」

小瀬は惣家を越えて彼女を睨む。

「私たちを騙して毒薬を飲ませるような人たちですよ。優勝したつて本当に解毒剤が貰えるかどうかも分かんないですよ」

「陽奈、やめとけ」

笠間はそう言いながらも、彼女の言葉にさらなる焦りを抱かされる。

「……俺は生き残れる可能性で言っただよ。何もしないままだと俺たちは死ぬんだ。クイズが不正解だけで毒薬を飲ませるような奴らだ。180分後に死ぬつて言うなら絶対に死ぬと思うぜ。違うか？」

小瀬の反論に陽奈は口を結ぶ。多分、毒薬は本当だろう。打開策もないままに、他の参加者たちも回答席へと戻っていく。

「私……嫌です。そんな、自分が助かるために誰かを死なせてしまうようなこと。でき

ません」

惣家は胸の十字架を軽く手で押さえて訴える。

「でも全員が回答席に立たないと、フジコーはクイズを始めるつもりはないようだ」

當麻は藤尾の方に軽く目を向けて言う。彼は参加者たちのやり取りを黙って見つめている。

「クイズを始めれば、また不正解者として誰か1人が殺されるかも知れない。しかし問題によっては助かる可能性だってあるんじゃないかな」

「でも」

「でも、ここで君が参加してくれなければ、僕たちは確実に全員死ぬことになるだろう」

「……はい」

「どっちが正しいと思う？ いや、どちらの方にまだ未来があると思う？」

當麻は項垂^{うなだ}れている惣家をゆくりと説得する。彼女は眉間に皺を寄せてしばらく悩んでいたが、やがて静かに肯^{うなず}いて回答席へと戻った。

「フジコーさん。2問目を始めよう」

敷島が険しい顔付きのままそう言う。藤尾は満足げに肯^{うなず}くとスツールに座り直して声を出した。

『結構です。それでは第2問』

藤尾の声を受けて、今度は天井からヒモに吊された白い箱がゆっくりと降りてくる。皆の視線を集める内に箱は4面ディスプレイの中を通り、そのまま第1問目で使われた机に着地した。箱は地面に触れると独りでに展開する。

「……ピストル？」

有里が箱の中から現れたものを見て呟く。そこには黒く光るピストルのようなものが沢山積み重なっていた。

『第2問。ここに皆さんと同じ数、9挺のピストルがあります。しかしこの中で8挺は仲間同士ですが、1挺だけ仲間外れのものがあります。さて、その仲間外れとは一体どれでしょうか？ 皆さんはそれ以外の8挺のどれかを選んでください』

「……また、仲間外れ探しじゃないか」

しばらくの沈黙の後、敷島が強張った声で言った。これでまた、確実に1人が命を落とすことになる。

「結局、誰かが犠牲になるしかないみたいよ」

有里はクイズを強行した小瀬を責めるようにそう言うが、他に解決法がある訳でもなく、それ以上は何も言えなかった。小瀬は黙って回答席を出ると中央の机へと足を運ぶ。他の者もそれに続いて動き出した。

「……拳銃なの？ やっぱり」

陽奈は積み上げられた1挺を取り上げ言う。

「今度は仲間外れが撃たれるのか？ 分かりやすいな」

當麻が黒縁眼鏡を整えて呟く。笠間も机に近付きその1挺を手にとってみた。黒光りしたピストルは金属製のようなだが、思ったよりも軽く、L字に曲がった銃身とグリップの間に引き金が付いている。表面の凹凸も少なく、まるで子供の落書きのようにシンプルな形状だった。

「弾は、出ないな」

敷島は天井に向かって数回引き金を引くが、ピストルには何の反応も見られない。

「い、いいのかな？ そんなことして」

塩谷が戸惑いながら言う。

「引き金を引くなどとは言われてませんからね。オモチャか？ これは」

敷島はそう言いながらも他のピストルを取り引き金を引く。他の者たちも恐る恐る試してみるが9挺全てが無反応だった。

「まあそんなに簡単に仲間外れが分かるとも思えないな」

當麻が冷静にそう言った。

「ねえ翔太。14って何かな？」

陽奈が笠間の袖を軽く引いて尋ねる。

「14つて？」

「ほら、ここ」

彼女はそう言つて手を開き、ピストルのグリップを示す。見るとグリップのほぼ中央に『14』という刻印があった。

「私、銃とか分かんないんだけど」

「……いや、こっちは21だ」

笠間が自分の持つピストルを確認すると、同じ場所に『21』と刻印されていた。

「何の意味があるんだろう。他は？」

「あの、こちらは5番となっております」

2人の会話を聞きつけた紀寺がピストルを見せて言う。

「何なのでしょうか？」

「分からないけど、これが多分ヒントになるんだろうな」

「ちよつとみんな、銃を置いて全部を見比べてみませんか？」

陽奈がそう提案すると、皆は領いてピストルを机に置き始める。反対意見が出ない所を見ると、まだ誰も解答には至っていないようだ、多分。

9挺のピストルはどれも同形状で、どれも引き金を引いても弾は発射されない。ただ、恐らく唯一の違いとして、グリップ部分にそれぞれ異なる数字の刻印がされていた。数

立ち読みサンプル はここまで

字は少ないものから順に、『5』、『10』、『13・1』、『13・5』、『14』、『16』、『19』、『21』、『22』となっていた。

「今度は数字か」

机の周囲を彷徨^{うろた}きながら敷島が呟く。笠間は黙つて腕を組み、照明を受けて黒く光るピストルを見下ろしていた。9つの数字の中に、仲間外れがいる。この、法則がありそうで思いつけない数字群にはどんな意味があるのか？

「多分、小数点の付いた2つの数字がキーなんだろうね。笠間君、分かる？」

有里が上目遣いで笠間に尋ねる。

「分かりません、さっぱり」

「ほんとに？」

「……分かっていたら、教えますよ」

笠間は自分の回答席に戻ると、ポケットから携帯電話を取り出し『シーガル』にアクセスする。何もしない訳にはいかない。

「大丈夫ですか？ 惣家さん」

隣の席では陽奈が、青ざめた惣家に声をかけていた。彼女は今にも泣きそうな表情で何度も背^{うな}いている。柳原の死にショックを受け、今また誰かが死ぬかも知れないクイズを前に脅えているのだろう。陽奈も同じ気持ちであるには変わりないだろうが、それでも周りに気を遣うのが彼女の性格でもあった。携帯電話のディスプレイには検索結果が